平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

学校名	相楽東部広域連合立和束中学校

校 長 名：浅田平詔
所 在 地：京都府相楽郡和束町釜塚北ノ畑１
電話番号：0774-78-2012

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	総合的な学習の時間

《研究主題》

地域と連携した横断的・総合的な学習や探究的な学習を通した総合的な学習の時間の創造～ふるさと和束をほこりに思い，愛する心を持った生徒の育成～

【研究の要点】

本校生徒の学力の向上については従前から様々な教育実践を通して取り組んできた。しかしながら，自分たちが育ってきたふるさと和束での生活に対して愛着が持ちにくく，交通等が充実した都市に対する憧れが強いという実態がある。

そこで本校の総合的な学習の時間では，地域の学習素材を活用し，各教科等で身に付けた知識や技能と，総合的な学習の時間を相互に関連させることで，探究活動に対して主体的，協同的に取り組む態度と，質の高い学力を育むとともに，ふるさと和束を愛する心を持った生徒の育成を目指し，研究を進めることとした。

本校の研究の重点は以下の3点である。

１ 総合的な学習の時間の構想

本研究を始めるまでの本校の総合的な学習の時間は，目標や内容を明確にせず，身に付けたい力も曖昧で，教科との関連も不十分という実態があった。

初めに，本校として総合的な学習の時間を展開するための構想を考えた。

総合的な学習の時間の研究を進めるに当たっては，目標，内容，方法，評価の4点を明確にした。

【具体的な取組】

(1) 総合的な学習の時間を進めるための基本的な考え方を明確にする。
(2) 校内推進体制を整備する。
(3) 学習指導要領に定める総合的な学習の時間の目標と育てたい資質や能力及び態度をふまえ，本校独自の総合的な学習の時間の目標と育てたい資質や能力及び態度を明確にする。
(4) 本校が総合的な学習の時間の内容を「お茶学習」「郷土学習」「生活学習」に決める。
(5) 総合的な学習の時間を進めるための方法を決める。
(6) 総合的な学習の時間全体の評価を実施するための評価項目を決める。

２ カリキュラムの作成と評価

本校が考えた総合的な学習の時間の構想に基づき，実践するに当たっては学習させたい内容が計画的に進められるように，きめ細かいカリキュラムを作成した。

【具体的な取組】

(1) カリキュラム作成の考え方を明確にする。
(2) 「お茶学習」「郷土学習」「生活学習」の目標と内容を明確にしたカリキュラムを作成する。
(3) 全体計画と年間指導計画を作成し，3学年を通した系統的な計画を立てる。
(4) 探究型学習を重視した単元計画を作成する。
(5) 単元実施後に評価を行い，次年度の実践につなげる。

３ 授業改善

カリキュラムが存在しても，授業を実践するに当たっては，各時間の具体的な指導内容や，各時間の目標，内容，方法，評価を明確にし，具現化を図ることが重要である。

本校では学習指導案や，外部講師を活用する際の留意点，教員の指導体制及び授業評価についても研究を行った。

【具体的な取組】

(1) 学習指導案の作成に当たって留意する点を明確にする。
(2) 外部講師を活用する際の留意点を明確にする。
(3) 指導体制を「お茶学習研究部」「郷土学習研究部」「生活学習研究部」のそれぞれの担当教員が各単元の内容や各時間の授業内容を作成し，複数体制で授業実践を行うようにする。
(4) 研究授業などを実施した際には，教員間の相互評価を実施し，教員の指導力向上に努める。

以上3つの研究の重点をもとに，実践を重ねてきた。なお，具体的な実践例については，本文に示した。

本研究の成果と課題は以下の通りである。

【成果と課題】

生徒は調査活動やインタビュー学習等を通して地域の方々と接する機会が増えたことで，様々な考え方や意見に触れる事ができ，自己の生き方について考えるきっかけとなった。

地域の方々からは本校の総合的な学習の時間の取組に対して，期待以上の反響と，高い評価を得ることができた。また，取組を始める以前に比べて，学校教育活動に対する関心が高まり，外部講師の協力が得やすくなった。

評価規準に基づいた生徒の変容を全教職員が的確に把握し，評価できる方法が十分に確立できなかった。多様な評価を実施し，どの教師も生徒の変容を的確に把握することで，生徒や保護者から信頼される評価ができるように改善を図っていきたい。

Ⅰ 研究指定校の概要

1 学校・地域の特色及び実態

和束町は，京都府の南部に位置し，総面積6,487ha のうち，４分の３を山林が占めている。町の中央には，清流和束川が流れ，山の斜面には茶畑が広がる人口約 4,800 人の山間の町である。主産業である茶作りには住民の過半数がその生産に携り，煎茶の生産量は，京都府内第１位（平成 21 年度）を誇っている。

和束中学校は昭和 22 年の新学校制度発足時に誕生し，今年創立から 63 年を迎える歴史ある学校である。平成 21 年４月には，和束町と隣接する笠置町，南山城村の３町村教育委員会の統合に伴い，相楽東部広域連合立和束中学校として新たな歴史を刻み始めた。

本校生徒の７割近くが祖父母と同居し，自然豊かな環境の中で育っていることで，心優しく素直である反面，幼少時から少人数のため人間関係が固定化し，互いに練り合うことも少ないため言語力や思考力が乏しくなり，学習集団としての意欲も高めることが課題である。また，生徒は自分たちが住む町の自然，文化，産業，歴史等について深くは理解していないのが現状である。

2　学校の概要（平成 22 年 4 月 5 日現在）

	1年	2年	3年	計
学級数	1	1	1	3
生徒数	28	36	22	86

教員数 18 名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

1　研究主題等

(1) 研究主題

地域と連携した横断的・総合的な学習や探究的な学習を通した総合的な学習の時間の創造～ふるさと和束をほこりに思い，愛する心を持った生徒の育成～

(2) 研究主題設定の理由

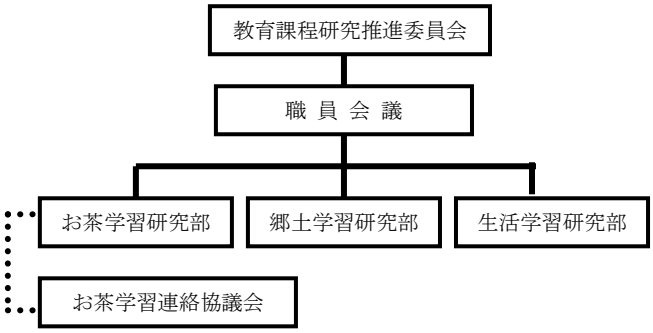
今回，学習指導要領が改訂されるに当たって，本校生徒の質の高い学力をはぐくむためには，本校の総合的な学習の時間の内容を体験的な学習に配慮しつつ，各教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習，探究的な活動となるようにする必要があると考えた。

本校生徒の学力の向上については従前から様々な教育実践を通して取り組んできた。しかしながら，自分たちが育ってきたふるさと和束での生活に対して愛着が持ちにくく，交通等が充実した都市に対する憧れが強いという実態がある。

そこで本校の総合的な学習の時間では，地域の学習素材を活用し，各教科等で身に付けた知識や技能と，総合的な学習の時間を相互に関連させることで，探究活動に対して主体的，協同的に取り組む態度と，質の高い学力をはぐくむとともに，ふるさと和束を愛する心を持った生徒の育成を目指し，研究を進めることとした。

(3) 取組体制

授業時数を弾力的に運用する以外に，全教職員が自分の学級や学年だけでなく，他の学級や学習時間の様子を十分に把握しておくことが大切であり，教職員間の協同体制の構築にもつながると考える。研究体制は以下の通りである。なお，お茶学習連絡協議会とは，茶栽培や茶産業の実態に詳しい地域の方々と，本校教職員によって組織された外部組織のことである。



(4) ２年間の主な取組

平成二十一年度	4 月：校内組織体制の確立 全体構想図，全体計画，年間指導計画の作成 5 月：職員研修（総合的な学習の時間の趣旨） 6 月：お茶学習連絡協議会の設置 8 月：校内研修（本町内フィールドワーク） 9 月：研究部会の定例実施を開始 国立教育政策研究所，教科調査官来校 2 月：研究協議会参加，１年間の取組評価 3 月：研究先進校視察
平成二十二年度	4 月：本年度の研究計画，目標と内容及び単元計画の確認，教育課程研究推進委員会の定例実施を開始 5 月：職員研修（平成 22 年度研究体制の確認） 8 月：職員研修（中間評価の実施） 10 月：国立教育政策研究所，教科調査官来校 11 月：研究発表会の実施（於：本校体育館） 12 月：次年度の単元計画の検討を開始

2　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 総合的な学習の時間の構想

本校は本研究を始めるまで，総合的な学習の時間の目標や内容が曖昧で，育てたい力を明確にすることなく実施していた。

今回，学習指導要領の改訂を踏まえて，本校の実態や生徒の発達段階から目標と内容を明確にし，総合的な学習の時間を進めるための構想を構築し，研究を進めた。総合的な学習の時間を進めるための構想は次の通りである。

① 総合的な学習の時間の基本的な考え方

本校では次の５つの項目を考えて総合的な学習の時間に取り組むこととした。

ア　学校，生徒の実態等に応じて横断的・総合的な学習や探究的な学習を行い，主体性を育てる。

イ　各教科等で身に付けた知識や技能と総合的な学習の時間を相互に関連付け，総合的に働くようにする。

ウ　本校の目指す生徒像の育成，生徒の課題解消に向けて行う。

エ　「目標」と「内容」を明確に設定し，全体計画を作成する。

オ　自己の生き方を考えることができるようにする。

特に，各教科等と総合的な学習の時間との関連については，各教科等で身に付けた知識や技能と総合的な学習の時間の探究的な学習を互いに関連付けることにより，生徒の質の高い学力をはぐくむことを目指す。

② 校内組織体制の整備

総合的な学習の時間において，質の高い豊かな学習活動を実践するためには，（ア）校内体制の確立，（イ）確実かつ柔軟な実施のための授業時数の確保と弾力的な運営，（ウ）空間，時間，人などの学習環境の整

備，（エ）保護者，地域及び関係機関との連携の４点を基本的な考え方とした校内の取組体制を構築した。取組体制は，Ⅱの１の(3)に示した通りである。

③　総合的な学習の時間の目標，身に付けたい力の設定

本校の総合的な学習の時間の目標は，本校の生徒・保護者・地域の実態や，地域の願いをもとに「横断的・総合的な学習の時間や探究的な学習を通して，探究活動に進んで取り組む能力と態度を育て，ふるさと和束への『ほこり』と愛着を高め，自己の生き方を考えることができるようにする」とし，育てたい資質や能力及び態度と観点別目標を設定した。

④　総合的な学習の時間の内容の設定

本校が定めた総合的な学習の時間の目標をもとに，ふるさと和束を「ほこり」に思い，愛する心を持った生徒を育成するためには地域教材は欠かせない。本校では，総合的な学習の時間の内容を地域教材に焦点化した。

本校が取り上げる学習の柱は，本町の主産業を学ぶ「お茶学習」，産業や歴史文化を学ぶ「郷土学習」，周囲を山に囲まれ，自然豊かな本町で人々が築いてきた生活環境を学ぶ「生活学習」の３つとした。さらに，すべての学習はふるさと和束のこれからの町づくりと関連付けている。

⑤　総合的な学習の時間の進め方の方法

内容をさらに具現化し，研究を進めていくための方法を３つ定めた。１つ目は教育課程に位置付けること，２つ目は体系的なカリキュラムを作成すること，３つ目は関係機関との連携を図ることである。

⑥　総合的な学習の時間の進め方の評価

年度末には総合的な学習の時間の進め方について評価・検証し，次年度の改善につなげるための評価を実施した。

(2)　カリキュラムの作成と評価

構想したことを実践するに当たっては，学習させたい内容が場当たり的で無計画にならないよう，きめ細かなカリキュラムが必要である。本校の，総合的な学習の時間におけるカリキュラム作成の考え方は，以下の９点で

・生徒の関心や疑問を生かし，生徒の主体性を育てる。
・意図した学習を効果的に生み出すために，生徒の意識，知識や行動を把握し，教材を開発する。
・「お茶学習」「郷土学習」「生活学習」をテーマにして，ふるさと和束を愛する態度を育てる。
・発達段階を考慮し，各学年の「目標」と「内容」を明確にする。
・意欲，知識･理解を事前に把握する。
・教科等と総合的な学習の時間の関連を図る。
・体験的な学習を重視する。
・家庭，地域社会，関係機関との連携を図る。
・カリキュラムマネジメントを行い，取り組む内容を検証し，改善する。

また，本校が総合的な学習の時間で扱うテーマは「お茶学習」「郷土学習」「生活学習」の３つであるが，学習を進めるに当たって，それぞれに生徒の発達段階に応じた「目標」と「内容」を明確にしておかなければ，生徒への指導が無計画で，場当たり的になる。そこで，本校では，学年ごとに「目標」と「内容」を明確にすることからカリキュラムを開発した。

さらに，生徒の主体性は，問題をつかむ，予想する，調べる，話し合う，表現する，発展するといった一連の探究型学習を重視することで発揮できる。本校では，この探究型学習を重視してカリキュラムの開発を行っているが，主体性と，学び方を獲得させるために，下の２つに考慮し，カリキュラムを作成している。

①
意欲・関心の喚起
↓
理解の進化
↓
問題解決能力
↓
行動できる

②
課題を把握する
↓
計画を立てる
↓
必要な情報を集め、分析する
↓
自分の考えをまとめ、もつ
↓
伝える

カリキュラム作成の考え方をふまえ，かつ本校が独自に設定した「目標」と「内容」をもとにして作成した単元計画の一例を以下に示す。

この単元計画は，１年生郷土学習の「昔の和束のお茶」である。

全ての単元計画において，「目標」「内容」「方法」「評価規準」及び指導体制を明示するとともに，指導計画では，単元全体の指導の流れと，各教科等と総合的な学習の時間の関連について示している。

単元計画

ねらい		昔の茶の生産を調査しまとめ，発表させることで，資料分析や情報活用力，発表する力を培う。
育てたい資質能力及び態度	学習の方法に関すること	収集した必要な情報から自分の考えを持ち，効果的にまとめ，分かりやすく発表することができる。
	自分自身に関すること	町の良さに気付き，ふるさと和束を誇ることができる。
	他者と社会とのかかわりに関すること	課題に対して協同して解決することができる。
時間数		7時間
学習形態		グループ討議，調べ学習，インタビュー学習
教材		ワークシート
指導体形		お茶学習研究部
家庭・地域との連携		茶農家
評価規準		ふるさと和束の茶に愛着を持つ。（関心・意欲・態度） 異なる意見や他者の考えを受け入れることができる。（思考・判断・表現） 自分たちが調べたことを他者に伝えられる。（技能） ふるさと和束の茶産業について理解する。（知識・理解）

指導の流れ

総合的な学習の時間（１時間）
・現在のお茶の栽培方法を知る。
・昔のお茶の栽培方法（茶の木の形、霜対策、運搬方法、茶摘み）はどうだったか予想をする。
・調査計画を立てる。（誰に聞けばよいか、何を調べたらよいか）

総合的な学習の時間（１時間）
インタビューの練習をする【マナー講座】
・インタビューや電話をする際の作法を知る。
・インタビューのための原稿を作る。
・電話でインタビューする相手に予約を取る

総合的な学習の時間（２時間）
インタビューに行く【情報収集】
・茶農家や、専門家にインタビューをする。
・必要な情報を収集する。

総合的な学習の時間（２時間）
昔の茶の栽培方法【まとめ】
・インターネットで情報を収集する。
・収集した情報を模造紙にまとめる。

総合的な学習の時間（１時間）
昔の茶の栽培方法【発表】
・模造紙にまとめたことを発表する。

単元の構想及び実践に当たっては，生徒の興味・関心及び実態をふまえた学習活動になるように，当該学年までの生徒の学習経験や実態を，アンケート等を通して事前に把握した上で，指導している。そして，単元実施後には研究部ごとにカリキュラムを評価し，次年度の実践に生かしている。

(3) 授業改善

カリキュラムが存在しても，各時間の具体的な指導内容や，生徒が関心を持つ授業を実践するためには，各時間の目標，内容，方法，評価を明確にし，具現化を図ることが重要である。

以下では授業を実践する中で必要となる学習指導案や，外部講師を活用する際の留意点，教員の指導体制及び授業評価について示す。

① 学習指導案の工夫

本校が作成した単元計画や指導計画はカリキュラム全体を示しているが，１単位時間の授業内容までは明示していない。そのため，１単位時間の授業内容及び教材は，学年の実態もふまえた上で，各研究部で作成することとしている。その際，学習指導案の作成に当たっては以下の５点に留意している。

・単元計画を具体的に表現する学習指導案を作成する。
・各単元での目標や身に付けさせたい資質能力及び態度をふまえた上での本時の目標を設定する。
・本時に扱う内容についての生徒の実態を明確にする。
・使用する教材を通して学ぶ学習事項について明確にする。
・評価は，本時に獲得させたい内容や，ねらいとする資質や能力及び態度が身に付いたかを表す。

② 外部講師の活用

本校の総合的な学習の時間で扱う授業内容の一部には，専門的な知識を必要とする場合がある。その際，本校では地域の専門家の方々に助言を仰ぐことや，外部講師として授業に招へいし，総合的な学習の時間の学習の充実に努めている。

③　指導体制

本校の総合的な学習の時間の指導は，全校体制で指導に当たっている。「お茶学習研究部」「郷土学習研究部」「生活学習研究部」のそれぞれの担当教員が各単元の内容や各時間の授業内容を作成している。

また，事前に教員の役割分担を明確にし，学年担当の教員も含めた複数体制で指導に当たり，いわゆる「担任任せ」の授業にならないように配慮している。

このように教員が総合的な学習の時間の指導方法や指導内容に関して協同的に考え，取り組むことで，授業の組み立て方の技量や，指導力の向上を図ることができる。

④　授業評価

本校では校内研修等の時間を活用し，教員の総合的な学習の時間の指導力を向上させるべく，評価シートを活用しながら，授業の相互評価を実施し，授業改善に努めている。

本校が作成した評価項目は以下の通りである。

- 獲得させたい内容が身に付く授業展開になっていたか。
- 身に付けさせたい資質や能力及び態度が育てられたか。
- 授業で使用した教材は目標達成に向けて効果的であったか。
- 授業の中に言語活動が取り入れられていたか。
- 学習形態や指導体制に工夫が見られたか。
- （外部講師を活用した時のみ）外部講師は目標達成に向けた有効な支援者であったか。
- 授業全体の評価はどうだったか。

(4) 実践例

以上の考え方をふまえて実践した単元の一例として，お茶学習部に位置付けているお茶体験学習を紹介する。本単元では，本校が管理する茶園での茶摘体験学習を皮切りに全学年で学習するという内容である。

①　目標と内容

「お茶学習」は，お茶の歴史や現状を知る「知識学習分野」と，地域での体験学習を中心とした「体験学習分野」から目標に迫るように設定した。

②　単元計画

目標と内容に基づいて単元指導計画を作成した。単元の学習を始めるに当たって，生徒のお茶に対する関心や，小学校段階でのお茶学習の状況を把握することで，生徒の学習経験に配慮した単元計画を作成した。本年度は，生徒の興味関心を高めるための導入段階での体験活動を充実させるとともに，カリキュラムの中に本校生徒の課題であるコミュニケーション能力を育成するようにした。

③　カリキュラムの考え方に基づいた実践

新しく改訂された総合的な学習の時間では「探究的な学習」と「協同的な学習」が重視されている。本単元でも探究の過程を意識して実践した。

本年度は生徒のお茶作りに対する関心をより一層高めるべく，例年実施している茶摘体験に加えて，茶葉を詰めるパックのパッケージをデザインさせた。そして生徒たちが摘んだお茶の活用方法として新茶会を開催し地域に還元することを全校生徒で決定した。

新茶会とは，７月に町内 15 ヶ所の公民館及び集会所に全校生徒が出向き，地域の方々に自分たちが摘んだお茶を急須で振る舞うといった内容である。なお，新茶会の告知方法や飾り付けについては，各地域担当の生徒に委ねた。

この学習についても，以下の表の通り，探究型学習を重視している。

課題を把握する	より良い新茶会にするためにはどうすればよいか。
計画を立てる	新茶会の内容と，実施までの計画を校外班ごとに立てる。
情報収集	新茶会の実施（町内の公民館及び集会所）とそのときに取ったアンケート結果を分析する。
自分の考えを持つ	分析したことを模造紙にまとめ，お茶の淹れ方の改善点や栽培の工夫点などに気付く。
伝える	全校掲示により発表する。

④　生徒の変容

生徒が新茶会を終えた後に書いた感想には，参加してくださった地域の方々の助言を聞き，さらに探究しようとする生徒の姿が見られた。また，多くの生徒が「また来年も新茶会を開きたい。」と書いており，準備段階から含めてこの行事を通して達成感を感じているように見受けられた。

【生徒の考えや気付き】（生徒のまとめより抜粋）

お茶の淹れ方	煎茶は熱いお湯よりも７０℃くらいのぬるめのお湯で淹れる方が美味しいということがわかった。
「和宝」を広める方法	若い人の来客が少なかったので，今度は若い人にも「和宝」（和東中学校産のお茶のブランド名）のことを知ってもらえるような取組をしたい。

作法やマナー	お茶は良かったと言ってくれた方が多かったけど，身だしなみやマナー言葉づかいの評価はあまりよくなかった。そうした面については今後注意する必要がある。
ふるさと和束に対して	和束町の人達はみんな優しいということが改めてわかった。これからは和束町のおいしいお茶をもっと宣伝していきたいと思った。

⑤　実践後の評価

本単元の実践終了後は，担当の教員で実践の評価を実施した。本年度実施した内容は，昨年度の評価をもとに，生徒がより興味・関心を持つように工夫したため，教員の評価では概ねよい評価が得られた。しかし，より充実した学習内容にするためには，まだまだ改善の余地があるので，次年度の実践に生かすように研究を進める。

3　研究の成果と課題

(1) 成果

①　生徒に関すること

ア　総合的な学習の時間が生徒たちにとってふるさと和束を見直す機会となり，地域の人や自然等のよさに気付き，本町を肯定的にとらえるようになってきた。

イ　各教科等での学習に対して消極的な生徒も，総合的な学習の時間では自身の長所を発揮し，最後まで投げ出さずに取り組むことができた。

ウ　調査活動やインタビュー学習等を通して地域の方々と接する機会が増えたことで，様々な考え方や意見に触れる事ができ，自己の生き方について考えるきっかけとなった。

②　教員に関すること

ア　ＰＤＣＡサイクルに則り，カリキュラムの見直しを実施することで，生徒たちが関心を持てる学習内容に改善できている。

イ　各研究部会を教育課程内に組み込むことで組織を整備し，放課後の部活動に影響なく，生徒の学習活動を支援する体制を構築することができ，さらに教科や学年の枠を超え，協同して取り組むことができた。

ウ　本町の産業や，地域の素材を知るための職員研修を重ねることで，職員の本町に対する理解が深まるとともに，専門性を高めることにもつながった。

(2) 課題

①　生徒に関すること

ア　本研究を始める以前に比べて，生徒たちが地域の方々と接する機会は格段に多くなったが，積極的に地域と関わる姿勢が不十分である。今後は，生徒一人一人が地域社会の一員であることを認識させ，学習を展開する。

イ　総合的な学習の時間に対する学習意欲は高まったものの，各教科等との関連性について認識が十分でない。総合的な学習の時間の中で，教科等で培った知識･技能を活用していることを意識させることが必要である。

②　教員に関すること

ア　評価規準に基づいた生徒の変容を全教職員が的確に把握し，評価できる方法が十分に確立できなかった。多様な評価を実施し，どの教師も生徒の変容を的確に把握することで，生徒や保護者から信頼される評価ができるように改善を図る。

イ　総合的な学習の時間と，各教科等とを関連付けた指導については，より一層充実を図る必要がある。

以上の成果と課題以外にも，地域の方々からは本校の総合的な学習の時間の取組に対して，期待以上の反響と，高い評価を得ることができた。また，取組を始める以前に比べて，学校教育活動に対する関心が高まり，外部講師の協力が得られやすくなったことも事実である。

(3) 今後の展望

本研究は質の高い学力を育むことと，ふるさと和束に対する愛着を深めることを目指して取組を進めてきたものである。まだ研究途中ではあるが，生徒との日常の会話や，単元終了後の感想文に「苦労したり，大変なことがあったけど，この取組を通して和束町の良さを改めて知ることができた。和束に住んでいて良かった。」という一文を見る限り，生徒のふるさと和束に対する考え方は確実に変容しつつあることは事実である。

あわせて，単元計画の作成や，指導方法の研究など，本研究を通して教職員の指導力が向上したことや，地域への関心を高めたことも大きな成果であった。

研究協議会の中で論議した，地域との関わりや，カリキュラム作成の考え方については，大学教授からの助言や本研究における先進校の取組を参考に，本校の総合的な学習の時間がより一層充実した内容となるように改善を図る。また，全ての教職員が各教科と総合的な学習の時間との関連についての理解を深め，教科等の指導方法の改善を図ることも，質の高い学力を育む上で必要である。

本校の教育活動に対して，地域の方々の関心をより一層高め，学校，保護者，地域が一体となった教育をより充実させるとともに，「開かれた学校」として地域から信頼される教育実践を重ねていきたい。

平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

ふりがな 学校名	やずちようりつはつとうちゆうがつこう 八頭町立八東中学校

校 長 名：渡 邉 二 之

所 在 地： 鳥取県八頭郡八頭町北山51番地

電話番号： 0858-84-2014

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	総合的な学習の時間

≪研究主題≫

人との関わり合いの中で，より良い生き方を求めて，意欲的に学ぶ生徒の育成

【研究の要点】

〇これまでの体験的な学習を見直し，探究的な学習へと改善し，地域を題材とした3年間の系統的な単元カリキュラムができた。

〇生徒にアンケートを実施し，生徒が総合的な学習の時間（以下，総合的な学習）に意欲的に取り組み，探究的な学習の楽しさを感じていることが分かった。また，生徒が地域に関心を抱くようになり，教師も地域のことを理解するようになった。

〇教師にもアンケートを実施し，教師に総合的な学習の意義が感じられるようになったことが分かった。それには，従来の体験的な学習を見直すことにより，教師の探究的な学習への理解が早かったように思われる。

〇聞き取り活動や発表活動を通して，地域の人との出会いが増え，学校と保護者や地域のつながりが一層強くなった。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

・山間部に位置し，過疎化のため地域の活力が乏しくなっている。

・生徒数が減少する中で，地域と学校とのつながりを維持する取組が必要であり，保護者からの学校に対する期待感も高い。

・明るく，素直な生徒が多く，学校行事や生徒会活動には積極的に取り組んでいるが，授業には受け身で，潜在的な力が発揮されていない。

・人前で意見を言ったり，発表したりすることが苦手な生徒が多い。

・地域が好きだという生徒は比較的多いが，地域と自分との関わりや将来の生き方を考えることが少ない。

２　学校の概要（平成22年4月5日現在）

	1年	2年	3年	特別支援学級	計
学級数	２	２	２	４	１０
生徒数	３４	３７	３４	６	１１１

教員数　１９名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

(1) 研究主題

人との関わり合いの中で，より良い生き方を求めて，意欲的に学ぶ生徒の育成

(2) 研究主題設定の理由

・人と関わり合いながら地域に学ぶ探究的な学習を行い，他者の意見や考えを聞く力を育てるとともに，物事の見方や考え方などの思考力を高める。

・地域から学んだことを基にして，生徒自身が地域の発展を考えるプロジェクト学習を行い，生徒が地域とのつながりを感じるとともに，将来の生き方につながるような単元を創造する。

・現状に満足するのではなく，より高い目標をもって,意欲的に学ぶ生徒の育成を目指す。

(3) 取組体制

中学校では，学年単位で総合的な学習に取り組むことが多い。本校でも，学年単位で実

践を行った。学年を動かすのはミドルリーダーの学年主任の働きが重要である。そこで，初年度は，これまでの体験的な学習を探究的な学習に改善するにあたって，学年主任が探究的な学習を理解するように「学年部会」の上に「総合的な学習部会」（教頭，教務主任，学年主任，研究主任）を組織した。

２年目は，学年主任の探究的な学習への理解が進んだので，「総合的な学習部会」を廃止し，「学年部会」のみとして，学年の機動性を高め，随時，研究主任と各学年主任が直接話し合うようにした。

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	・これまでの全体計画と年間指導計画を見直し，新たな総合的な学習の全体目標，つけたい力，単元（探究的な活動）を設定した。 ・従来の体験的な学習を探究的な学習に組み替えた。 ・生徒が総合的な学習の取組を振り返り，自ら語る場として，学期末に担任外の教師と面談する場を設けた。 ・実践を継承し，改善するための様式を作成した。 ・年２回（７月，１１月）生徒，教師に意識調査を行った。
平成22年度	・単元構成を見直して，進路指導の観点で設けていた単元を廃止し，地域を題材とした探究的な学習に一本化した。 ・総合的な学習の時間を「輝きセミナー」と名付け，活動のねらいやつながりが意識されるように単元名を工夫した。 ・学習活動をリサーチ活動を中心としたものと発表活動を中心としたものの２系列にまとめた。 ・年２回（７月，１１月）生徒，教師に意識調査を行った。

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) ３年間の系統的なカリキュラムの開発

①　研究の重点

これまでの体験的な学習を見直し，探究的な学習に組み替える。

②　具体的な取組

これまでの体験的な学習を，地域を題材とした探究的な学習に組み替えた。各学年の主題を，１学年は「地域を知ろう」，２学年は「地域から学ぼう」，３学年は「地域を活性化しよう」とした。学習活動を見直した概略は次のとおりである。

１学年宿泊研修：これまでは近くの氷ノ山の宿泊施設に１泊して、登山と飯ごう炊さんなどの野外活動を行っていた。そこで，野外活動をやめて，地域を知る活動として氷ノ山地域の活性化に取り組んでいる人々の聞き取り活動を行った。例えば，棚田の保全に取り組んでいる人，初めてロッジを作った人，スキー学校の校長先生などであった。聞き取った内容は，パワーポイントにまとめてプレゼンテーションを行った。

２学年職場体験：これまでは，教師が事前に事業所を回り，体験できる事業所のリストを作成してから生徒が選択していた。それを，生徒自らが事業所を選び，直接依頼するようにした。断られるのも本物の体験である。しかし，１年目の課題設定では，従来の進路指導という色彩が強く残り，生徒が自らの興味関心だけで事業所を選んだ。そのため，農業が主産業でありながら，一人も体験する生徒がいなかった。そこで，２年目は，地域を支える職場を体験するように課題設定を見直した。

３学年修学旅行：この行事も進路指導の観点から企業訪問を行っていた。それを，外から見た鳥取県をテーマに，東京で鳥取県の知名度アンケートを実施したり，新橋にある鳥取県のアンテナショップを訪問したりして，どのように鳥取県をＰＲしているかを学んだりした。アンケートの結果から，鳥取を「取鳥」と書く人が予想以上にいたり，島根県と鳥取県の位置を取り違えたりすることから鳥取県の知名度がまだま

だ低いことを実感し，活性化の必要性を実感した。

従来の体験的な学習を組み替えるとともに，３年間の系統的な学習の流れをつくるために，１学年に職場体験の事前学習となる職場訪問を設けた。また，２年目は，進路指導の観点で残していた職業調べや高校調べを廃止して，２学年の職場体験，３学年の修学旅行に向けて探究的な学習となるよう前学年の３学期から取り組んだ。これにより，本校の総合的な学習が地域を題材とした探究的な学習で一本化した。

【１年目の単元構成】

	１学期	２学期	３学期
1年	宿泊研修	職場訪問	職業調べ
2年	職場体験	高校調べ	地域の課題
3年	修学旅行	地域の活性化	10年後の私

⇩

【２年目の単元構成】

	１学期	２学期	３学期
1年	宿泊研修	職場訪問	**職場体験に向けて**
2年	職場体験	**地域の活性化１**	**修学旅行に向けて**
3年	修学旅行	地域の活性化２	10年後の私

③　考察及び成果と課題

従来の体験的な学習を見直したことで，教師の探究的な学習への理解が早かったように思われる。例えば，職場体験の事業所の選択を教師主導から生徒主導に変えたことである。それによって，生徒が事業所に直接依頼することが本物の体験となった。教師は，生徒が電話を終えて達成感を得る姿を見て，生徒に任せ，生徒が主体的に取り組む学習の良さを感じていった。

１年目は移行の段階で，進路指導の観点が残っていたが，２年目で地域を題材とした探究的な学習で一本化できたことにより，総合的な学習のねらいがより明確となった。また，生徒が地域の人と関わる場面が多くなり，活動が充実した。

(2) 生徒自らが地域の活性化を考えるプロジェクト学習の開発

①　研究の重点

地域を題材とした探究的な学習のゴールとして地域の活性化を考えるプロジェクト学習を行う。

②　具体的な取組

１年目の３年２学期に地域の活性化を考えるプロジェクトとして，「輝け!マイタウン」という単元を設けた。２年目には，進路指導の観点の単元である高校調べを廃止して，代わりに，２年に地域の活性化を考えるミニプロジェクトを設けた。

カリキュラム開発に当たっては，それぞれの活動のねらいが分かり，つながりがイメージされるように単元名を工夫した。聞き取り活動を中心とした単元は「タウンリサーチ」という名称にし，発表活動が中心の単元は，１，２年を「トライアルタイム」，ゴールとなる３年を「輝け！マイタウン」と名付けた。本年度の「輝け！マイタウン」では，地元のローカル線である若桜鉄道の活性化を考えた。そして，思い出づくりをしながら若桜鉄道をＰＲする卒業列車を実現させることができた。さらに，卒業前の３年３学期には，３年間のまとめとして，「１０年後の私」と題した作文を書き，自分自身を振り返り，将来の生き方を考える単元「マイドリーム」を設けた。

こうして，本校の総合的な学習を地域が輝き，生徒が輝くという意味で「輝きセミナー」と命名した。できあがった３年間の単元構成は次の表のとおりである。

【輝きセミナー】

	１学期	２学期	３学期
1年	ﾄﾗｲｱﾙﾀｲﾑ1 （宿泊研修）	ﾀｳﾝﾘｻｰﾁ1 （職場訪問）	ﾀｳﾝﾘｻｰﾁ2 （職場体験に向けて）
2年	ﾀｳﾝﾘｻｰﾁ2 （職場体験）	ﾄﾗｲｱﾙﾀｲﾑ2 （地域の活性化1）	ﾀｳﾝﾘｻｰﾁ3 （修学旅行に向けて）

3年	ﾀｳﾝﾘｻｰﾁ3 （修学旅行）	輝け！ﾏｲﾀｳﾝ （地域の活性化2）	ﾏｲﾄﾞﾘｰﾑ （10年後の私）

③　考察及び成果と課題

２年目の取組で，活動内容が地域を題材としたものに一本化され，聞き取り活動を中心にした活動と活性化を考え，発表を中心とする活動の２つに系列化できたことで，単元間のつながりがとても円滑になった。また，２年の「トライアルタイム２」で，プロジェクト学習もスパイラルに取り組めるようになり，より深く地域のことについて考えられるようになった。

１年の宿泊研修は，リサーチ活動とも言えるが，聞き取ったことをパワーポイントでまとめて発表するという活動を柱と考えて，「トライアルタイム１」と名付けた。この１年最初の単元で，中学校での総合的な学習のイメージをつかませるとともに，プレゼンテーションのスキルの基礎を身につけさせることをねらいとした。

(3) 総合的な学習の変化に対する生徒と教師の意識調査

①　研究の重点

生徒と教師にアンケートを実施し，その結果により変容を見る。

②　具体的な取組

生徒アンケートは，年２回（７月，１１月）実施した。アンケート項目は，総合的な学習のねらい，内容，取組等に関するもので，全２９問を４件法で行った。

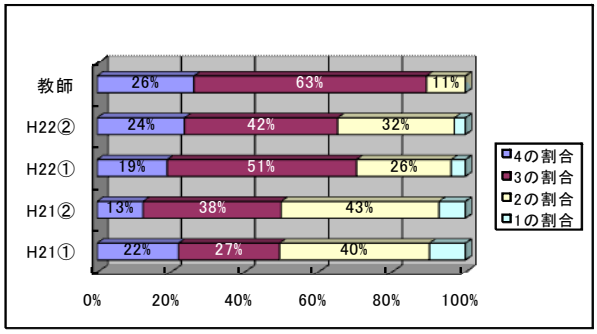
２年目の１１月には，生徒と同じアンケートを，教師が生徒を見た様子で判断して回答することにより，生徒と教師の総合的な学習の捉え方を比較した。

教師には，総合的な学習のイメージや実践の成果と課題について記述式のアンケートも実施した。

③　考察及び成果と課題

次のグラフは，生徒，教師アンケートの結果である。「Ｈ２１①」は１年目の７月，「Ｈ２１②」は１１月，「Ｈ２２①」は２年目の７月，「Ｈ２２②」と「教師」は１１月である。４件法では，４，３が肯定的な回答，２，１が否定的な回答である。いずれも全体平均の値である。

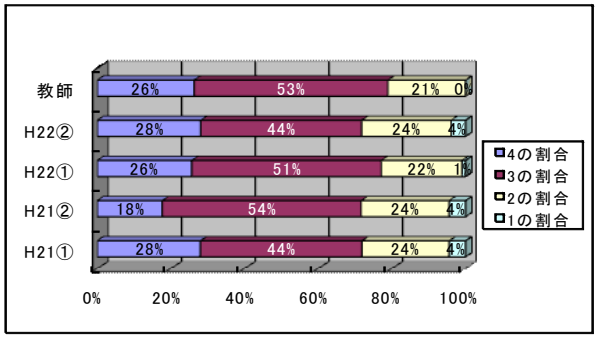
〇輝きセミナーの勉強は好きだ。



２年目に，地域を題材とした探究的な学習の流れに一本化したことで，肯定的な回答が２０％近く上昇している。３年間の学習が系統的につながった成果ではないかと考えられる。

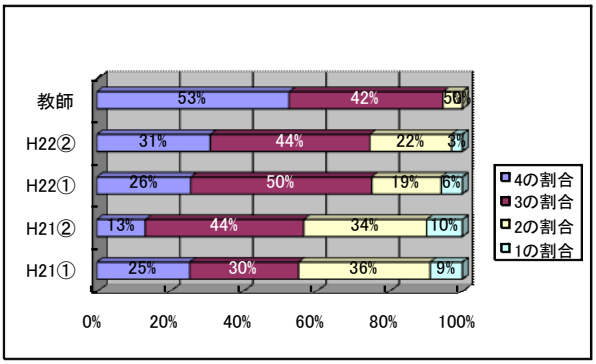
また，教師の肯定的な回答が生徒よりも２０％余り高い。教師は生徒の様子を見て，輝きセミナーの時間は生徒自身が思う以上に，生徒は楽しく学習していると感じている。つまり，教師の目からは総合的な学習がうまく進んでいると感じられているようである。

〇将来の夢や目標を考えることに役立つ。



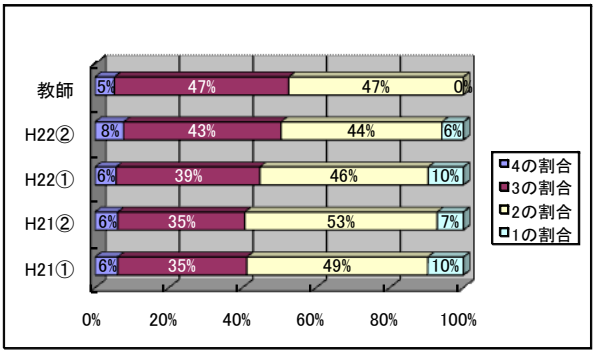
２年目に，単元を地域を題材とした探究的な学習に一本化したが，地域の人と出会い，話を聞いたり，地域の活性化を考えたりすることが自分の生き方を考えることにつながっているようである。

○いろいろな人と出会い，自分の考えが広がったり，深まったりすることがある。

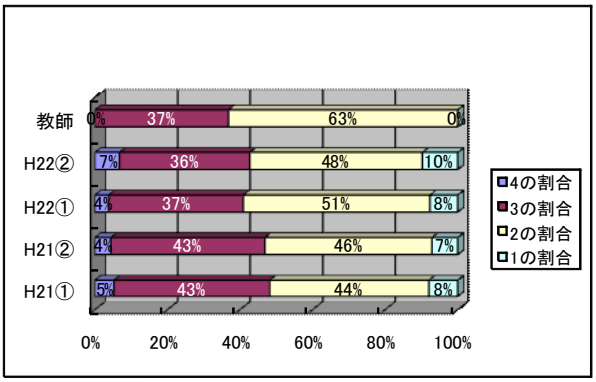


この結果からも，地域を題材とした探究的な学習に一本化したことの効果が出ていることが分かる。教師はほぼ１００％であり，人との出会いがとても有効であると感じている。本校では，学期末に，担任教師が個別指導をしている時間を利用して，担任外の教師で生徒と個別面談をして輝きセミナーについて話を聞いているが，その中でも，生徒は，地域の人と話をすることは自分自身にとても役に立つと言っている。

○知りたいことをうまく質問することができる。

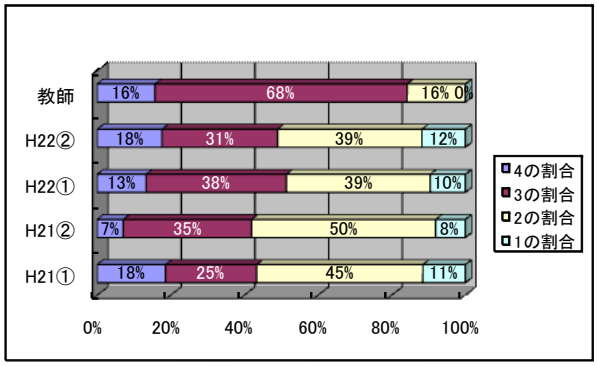


○質問されたことにうまく答えることができる。



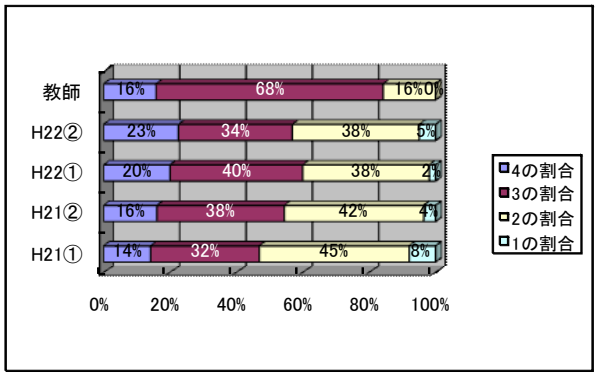
上記２つの項目とも肯定的な回答が半数に満たない。このことは，本校の課題であるコミュニケーション力の向上がまだ不十分であり，今後の課題であると言える。

○輝きセミナーを通して，自分が成長したと感じる。



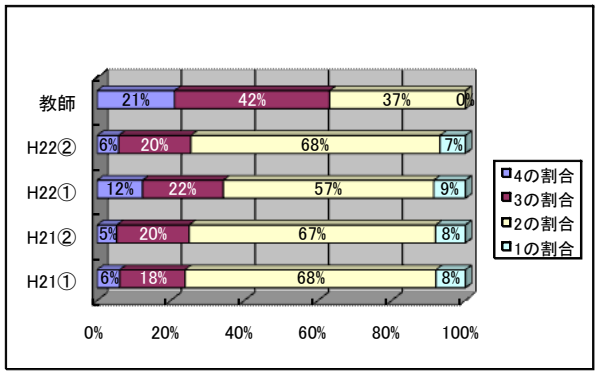
この項目では，教師の８４％が生徒は成長していると感じている。このことから，大部分の教師は，総合的な学習が生徒の成長に有効であると感じていることが分かる。しかし，生徒が自分の成長を感じているのは半数以下である。したがって，今後，教師は，生徒自身が自分の成長に気付くように，生徒との関わり方や評価の在り方を工夫していかなければいけない。

○輝きセミナーの授業で学習したことは，普段の生活や社会に出たときに役立つと思う。



先の項目と同様に，ほとんどの教師が総合的な学習は，普段の生活や社会に出たときに役立つと思っている。しかし，生徒にはそれが十分伝わっていない。又は，意識できていないと考えられる。ここでも，今後の指導の在り方，特に，評価の在り方を改善していく必要があると考えられる。

○輝きセミナーの学習は，教科学習にも役立つ。



最後に，総合的な学習と教科学習との関連について見ると，この項目が最も生徒の肯定的な回答が少ない。生徒はまだ総合的な学習と教科のつながりが感じられていないようである。教師もまだ６０％ほどであり，まず，教師自身が総合的な学習と教科のつながりを意識する必要がある。

もう一つの教師の記述式アンケートによると，総合的な学習に好意的なイメージ抱いている教師は１９人中１７人であった。否定的な２人は，やることが多く，準備が大変であると回答し，教科の学習を進めたいと考えている。総合的な学習の良さの記述では，探究的な学習３人，学校や教科の枠を超える学習３人，生徒が自分たちで考える時間３人，仲間づくり２人，学び合い２人，地域への関心２人，自由な発想１人，劣等感を感じない１人，と多様な回答があった。一方，課題は，準備５人，内容が盛りだくさん３人，時間と予算２人，他教科や学級活動とのバランス１人，生活に生かす手立て１人などであった。そして，総合的な学習と教科との連携では，後述の具体的なスキルの他に，各教科で活用できる力，班での話し合い，課題を解決する力，総合的な学習を通して自らの教科指導を振り返る（思考力の育成，言語活動の豊かさ，創造力の育成など）が挙げられていた。

国語：インタビュー活動，お礼状，新聞やプレゼンテーションなどの文章
社会：グラフ，図表
数学：アンケート処理
技術：コンピューターの操作
美術：デザイン

３　研究の成果と課題

この２年間で，地域を題材とした３年間の系統的なカリキュラムを開発することができた。これには，まず新教育課程に向けて学校全体で総合的な学習の改善に取り組むという管理職の強いリーダーシップがあった。その上で，実際に単元をつくるに当たっては，学年単位で取り組むため，ミドルリーダーである学年主任の働きが重要であった。そこで，１年目に，学年主任を中心とした「総合的な学習部会」を設けて，体験的な学習を探究的な学習に組み替えることを具体的に協議したことが効果的であった。また，単元を全く一からつくるのではなく，これまで行ってきた体験的な学習を見直すことにより，探究的な学習への理解が早かったように思われる。

アンケート結果にも見られるように，生徒は意欲的に取り組み，探究的な学習に楽しさを感じている。そして，教師にも総合的な学習の意義が感じられるようになった。また，生徒が地域に関心を抱くようになり，教師も地域のことが分かるようになった。保護者や地域には，学校の教育活動がよく見えるようになり，保護者や地域と学校とのつながりが一層強くなったように感じられる。

課題で最も大きいのは，教師の負担感である。負担感を減らすためには，カリキュラムを安定化して単元を固定することが効果的である。しかし，その一方で，単元の固定化はマンネリ化になりやすい。そのバランスが重要である。指導においては，生徒に総合的な学習の目的や意義がもっと感じられるようにしたい。それによって生徒の成就感が高まり，より自己成長感が得られると考えられる。